

(注2) 潜在クラスとの関連分析には帰属確率を用いる

潜在クラスは各クラスへの帰属関係を確率的に表すことから、クラスと他の項目との関連分析に際しても、その確率で表すのが適切である。

例えば、ある事例の帰属確率が、クラス1に対して0.97、クラス2に対して0.03、(全クラスへの帰属確率合計は1.00である)となっている場合、関連分析する項目に対しても同じ確率を適用する。

4) 食事過剰要求場面の解決方法

食事過剰要求場面で解決経験がある160件における、解決方法の割合を算出するとともに、解決方法をパターン化して、どのパターンがどのような結果に貢献するのか、さらにその貢献は高齢者パターンでどう異なるのか分析した。

(1) 解決方法の概況

食事過剰要求場面を解決する時に行った解決方法を具体的に記入してもらい、その内容を検討評価して43分類した。分類結果は、食事環境の調整に関するものが6分類、食事の工夫に関するものが13分類、声かけや会話の工夫に関するものが10分類、活動の工夫に関するものが9分類、その他が5分類であった。

有効回答158件のなかで多くあがったものは、「スタッフが一緒に食事をする」が91件(57.6%)、「おやつや代替え品を提供」が77件(48.7%)、「外出」が70件(44.3%)、「水分の摂取を増やす」が68件(43.0%)、「訴えを受容し、会話を多くする」が67件(42.4%)、「席の変更」が55件(34.8%)、「隣の席から離れる」が52件(32.9%)、「味の感想を伺う」と「食後のレクリエーション活動への誘導」が各46件(29.1%)、「食器を小さくし、おかわりを増やす、食事数を増やす」が32件(20.3%)などであり、1事例あたり平均5.5項目あげられた。(表2-2-4-1参照)

(2) 解決方法の組み合わせパターン

上記のように解決方法は多様な組み合わせであり、1事例平均5.5の方法で構成されている。43分類の方法の任意な数の組み合わせは天文学的とも言える数にのぼりその詳細を示すのは不可能に近い。そこで実際の組み合わせに高い確率で近似する組み合わせパターンを得るために潜在クラス分析を応用した(注3)。

その結果12の組み合わせパターンを得た。

第1パターンは平均3.5項目の組み合わせであり、「スタッフが一緒に食事をする」(58.3%)と「おやつや代替え品を提供」(54.1%)を主として、「席の変更」(36.5%)、「低カロリーにして大盛りにした」(35.7%)、「味の感想を伺う」(34.7%)などで構成されている。第1パターンの該当事例は26件(16.5%)である。

第2パターンは平均6.8項目の組み合わせであり、「外出」(99.6%)、「訴えを

受容し、会話を多くする」(90.4%)、「スタッフが一緒に食事をとる」(78.2%)、「水分の摂取を増やす」(77.7%)の4項目を共通ベースとして、「食事以外の話をする」(47.2%)、「味の感想を伺う」(42.8%)、「おやつや代替え品を提供」(42.9%)、「食器を小さくし、おかわりを増やす、食事数を増やす」(30.4%)、「低カロリーの間食や夜食の提供」(26.3%)、「食後のレクリエーション活動への誘導」(26.5%)などで構成されている。第2パターンの該当する事例は23件(14.6%)である。

第3パターンは平均2.8項目と最少の組み合わせであり、共通ベースはなく、「水分の摂取を増やす」(39.5%)、「おやつや代替え品を提供」(27.8%)、「席の変更」(31.2%)、「隣の席から離れる」(28.1%)、「訴えを受容し、会話を多くする」(37.0%)などに分散しつつも食事の工夫と食事環境の調整が多い。第3パターンに該当する事例は21件(13.3%)である。

第4パターンは平均5.7項目の組み合わせであり、「食後のレクリエーション活動への誘導」(99.2%)を共通ベースとして、「味の感想を伺う」(59.1%)と「おやつや代替え品を提供」(55.7%)も多く、「外出」(45.2%)、「低カロリーにして大盛りにした」(43.4%)、「水分の摂取を増やす」(40.5%)、「低カロリーの間食や夜食の提供」(38.7%)、「席の変更」(39.5%)、「隣の席から離れる」(22.5%)などで構成されている。第4パターンに該当する事例は19件(12.0%)である。

第5パターンは平均4.7項目の組み合わせであり、「スタッフが一緒に食事をとる」(99.7%)と「隣の席から離れる」(99.6%)を共通ベースとして、「待つてねと声かけ」(47.5%)、「訴えを受容し、会話を多くする」(25.3%)、「食後のレクリエーション活動への誘導」(44.3%)、「おやつや代替え品を提供」(31.8%)などで構成されている。第5パターンに該当する事例は15件(9.5%)である。

第6パターンは平均6.1項目の組み合わせであり、「スタッフが一緒に食事をとる」(99.6%)、「水分の摂取を増やす」(99.5%)、「隣の席から離れる」(90.6%)、「外出」(75.3%)の4項目を共通ベースとして、「おやつや代替え品を提供」(62.0%)も多く、「食事以外の話をする」(35.3%)、「席の変更」(26.7%)と「摂取状態に応じた食材形態変更」が(26.5%)、などで構成されている。第6パターンに該当する事例は11件(7.0%)である。

第7パターンは平均5.5項目の組み合わせであり、「外出」(99.5%)と「席の変更」(81.3%)を共通ベースとして、「食器を小さくしおかわりを増やす、食事数を増やす」(72.4%)、「スタッフが一緒に食事をとる」(63.5%)、「おやつや代替え品を提供」(63.8%)の3項目も多く、「訴えを受容し、会話を多くする」(36.7%)、「別の場所へ移動し会話する」(27.2%)、「水分の摂取を増やす」(27.3%)などで構成されている。第7パターンに該当する事例は11件(7.0%)である。

第8パターンは平均5.0項目の組み合わせであり、「訴えを受容し、会話を多くする」(60.2%)と「おやつや代替え品を提供」(50.4%)を主として、「低カロリー

ーの間食や夜食の提供」(47.9%)、「摂取状態に応じた食材形態変更」(37.0%)、「スタッフが一緒に食事をとる」(37.0%)、「食事時間の確認や説明を丁寧に(35.8%)」、「隣の席から離れる」(36.1%)などで構成されている。第8パターンに該当する事例は8件(5.1%)である。

第9パターンは平均11.9項目と最多の組み合わせであり、「外出」(99.3%)、「食後のレクリエーション活動への誘導」(99.1%)、「訴えを受容し、会話を多くする」(85.1%)、「水分の摂取を増やす」(84.5%)の4項目を共通ベースとして、「おやつや代替え品を提供」(70.2%)、「席の変更」(70.5%)、「隣の席から離れる」(70.4%)、「スタッフが一緒に食事をとる」(71.9%)、「待ってねと声かけ」(69.5%)、「味の感想を伺う」(57.6%)、「興味のあるものを提供」(56.9%)の7項目も多く、「摂取状態に応じた食材形態変更」(42.6%)、「カロリーを考慮し、好きなおかず数を増加」(42.2%)、「低カロリーの間食や夜食の提供」(29.2%)、「低カロリーにして大盛りにする」(27.3%)、「食事以外の話をする」(42.7%)、「計算ドリル」(42.6%)、「献立の掲示や説明」(42.6%)など多種多様な構成である。第9パターンに該当する事例は7件(4.4%)である。

第10パターンは平均7.3項目の組み合わせであり、「外出」(99.3%)、「食後のレクリエーション活動への誘導」(83.3%)、「スタッフが一緒に食事をとる」(99.4%)、「席の変更」(83.3%)の4項目を共通ベースとして、「低カロリーにして大盛りにした」(44.8%)、「カロリーを考慮し、好きなおかず数を増加」(42.9%)、「水分の摂取を増やす」(41.2%)、「食事以外の話をする」(45.2%)などで構成される。第10パターンに該当する事例は7件(4.4%)である。

第11パターンは平均9.0項目の組み合わせであり、「スタッフが一緒に食事をとる」(99.4%)、「訴えを受容し、会話を多くする」(99.1%)、「食器を小さくし、おかわりを増やす、食事数を増やす」(98.8%)の3項目を共通ベースとして、「味の感想を伺う」(66.8%)、「献立の掲示や説明」(66.4%)、「おやつや代替え品を提供」(66.1%)、「席の変更」(65.9%)の4項目も多く、「計算ドリル」と「興味のあるものを提供」、「外出」(33.9%)、「食後のレクリエーションへの誘導」(32.4%)、「隣の席から離れる」(33.6%)、「スプーンを小さくする」(33.2%)など多様に構成される。第11パターンに該当する事例は6件(3.8%)である。

第12パターンは平均7.2項目の組み合わせであり、「おやつや代替え品を提供」(98.9%)、「食器を小さくしおかわりを増やす、食事数を増やす」(98.4%)、「味の感想を伺う」(98.6%)、「献立の掲示や説明」(98.1%)の4項目を共通ベースとして、「水分の摂取を増やす」(49.9%)、「低カロリーの間食や夜食の提供」(49.4%)、「訴えを受容し、会話を多くする」(49.8%)、「スタッフが一緒に食事をとる」(25.6%)、「隣の席から離れる」(49.6%)などで構成されている。第12パターンに該当する事例は4件(2.5%)である。(表2-2-4-2参照)(潜在クラスモデルの評価経緯は表2-2-4-3参照)

(注3) 組み合わせパターンへの潜在クラス分析の応用

潜在クラス分析は(注1)に示したような局所独立を仮定して異質な部分集団を識別し、モデルの適切さを情報量規準で評価するのが一般的である。ここでは組み合わせパターンを一定水準以上に明確にすることを優先して、情報量規準によるモデル評価をある程度逸脱するのも良しとした。しかしながらモデルの極度な不適切を回避するために、“LatentGold”が算出する“Classification Statistics”(分類精度情報)の各指標を総合的に評価して局所独立の追及を優先したモデルを定めた。

ここで表す各パターンの該当件数も確率から整数換算した結果である。したがって、例えば第6と第7パターンのように僅差の確率であれば表示件数が同じ値(11件)となる。

(3) 解決方法の組み合わせパターンの貢献

このような解決方法がどんな結果に貢献するのか、12の組み合わせパターンと解決後のパターンの相関を分析した後、参考までに個別状況との関連を確認する。

まず、解決方法の組み合わせ12パターンと解決後の6パターンの帰属確率による相関分析を行うと、4通りの相関が認められる。

1つめは、解決方法パターン3と解決後パターン1の相関が有意水準1%で認められる。解決方法パターン3は、“「水分の摂取を増やす」、「訴え受容会話多く」、「席の変更」などに分散した平均2.8項目の最少組み合わせ”であり、これらの方法が、解決後パターン1の“自分の食事で満足するようになった”という結果に貢献している傾向が読み取れる。

2つめは、解決方法パターン12と解決後パターン3の相関が有意水準1%で認められる。解決方法パターン12は、“「おやつや代替え品を提供」、「食器を小さくしおかわりを増やす、食事数を増やす」、「味の感想を伺う」、「献立の掲示や説明」の4項目を共通ベースにして平均7.2項目の組み合わせ”であり、これらの方法が、解決後パターン3の“要求も穏やかになった”に貢献している傾向が読み取れる。

3つめは、解決方法パターン11と解決後パターン5の相関が有意水準5%で認められる。解決方法パターン11は、“「スタッフが一緒に食事をとる」、「訴えを受容し、会話を多くする」、「食器を小さくしおかわりを増やす、食事数を増やす」の3項目を共通ベースにして、平均9.0項目で2番目に多い多様な組み合わせ”であり、その多様な方法が、解決後パターン5の“食べ物の要求がなくなった”に貢献している傾向が読み取れる。

4つめは、解決方法パターン9と解決後パターン4の相関が有意水準5%で認められる。解決方法パターン9は、“「外出」、「食後のレクリエーション活動への誘導」、「訴えを受容し、会話を多くする」、「水分の摂取を増やす」の4項目を共通ベースとして平均11.9項目と最多で多種多様な組み合わせ”であり、その多様な

方法が、解決後パターン 4 の“食べ物の要求までの時間間隔が長くなった”に貢献している傾向が読み取れる。(表 2-2-4-4 参照)

参考までに、解決後の各状況との関連を分析したクロス集計によっても上記 4 通りの傾向が確認できる。

1 つめの解決方法パターン 3 では、解決後に“自分の食事で満足するようになった”が 62.3%と多くなっており、これは解決後パターン 1 の主要項目である。

2 つめの解決方法パターン 12 では、解決後に“要求する際の訴え方には焦燥感なく、笑顔も見られるようになった”が 75.0%と多くなっており、これは解決後パターン 3 の主要項目である。

3 つめの解決方法パターン 11 では、解決後に“食べ物の要求は無くなってきた”が 50.6%と多くなっており、これは解決後パターン 5 の主要項目である。

4 つめの解決方法パターン 9 では、解決後に“食べ物を要求するまでの時間間隔が長くなった”が 48.6%と多くなっており、これは解決後パターン 4 の主要項目である。(表 2-2-4-5 参照)

(4) 高齢者パターン別にみた、解決方法の組み合わせパターンの貢献

次に高齢者パターン 1 (一部介助、中程度重症度)に限定した相関分析を行うと、5 通りの相関が認められる (注 4)。

5 通りのうち、1 つめから 3 つめは上記でみた全体を対象とした 1 つめから 3 つめと同じ傾向である。

4 つめは、解決方法パターン 5 と解決後パターン 1 の相関が有意水準 5%で認められる。解決方法パターン 5 は、“「スタッフが一緒に食事をとる」と「隣の席から離れる」を共通ベースにした平均 4.7 項目の組み合わせ”であり、それらの方法が、解決後パターン 1 の“自分の食事で満足するようになった”に貢献している傾向が読み取れる。

5 つめは、解決方法パターン 10 と解決後パターン 5 の相関が有意水準 5%で認められる。解決方法パターン 10 は、“「外出」、「食後のレクリエーション活動への誘導」、「スタッフが一緒に食事をとる」、「席の変更」の 4 項目を共通ベースにして平均 7.3 項目の組み合わせ”であり、それらの方法が、解決後パターン 5 の“食べ物の要求がなくなった”に貢献している傾向が読み取れる。(表 2-2-4-6 参照)

参考までに、解決後の各状況との関連を分析したクロス集計によってもこれらの傾向が確認できる。

解決方法パターン 3 では、解決後に“自分の食事で満足するようになった”が 82.0%と多くなっており、これは解決後パターン 1 の主要項目である。

解決方法パターン 12 では、解決後に“要求する際の訴え方には焦燥感なく、笑顔も見られるようになった”が 100.0%であり、これは解決後パターン 3 の主要項目である。

解決方法パターン 11 では、解決後に“食べ物の要求は無くなってきた”が 66.6%と多くなっており、これは解決後パターン 5 の主要項目である。

解決方法パターン 5 では、解決後に“自分の食事で満足するようになった”が 54.8%と多くなっており、これは解決後パターン 1 の主要項目である。

解決方法パターン 10 では、解決後に“食べ物の要求は無くなってきた”が 51.8%と多くなっており、これは解決後パターン 5 の主要項目である。(表 2-2-4-7 参照)

また高齢者パターン 2 (一部介助、中高程度重症度) に限定した相関分析を行うと、4 通りの相関が認められる。(有意水準 5%で相関が認められる、解決方法パターン 11 と解決後パターン 3、および解決方法パターン 2 と解決後パターン 4、の 2 通りは、事例数が各 1 例にとどまるため省略する。)

1 つめは、解決方法パターン 9 と解決後パターン 4 の相関が有意水準 1%で認められる。これは全体でみた、4 つめの傾向と同様である。

2 つめは、解決方法パターン 5 と解決後パターン 3 の相関が有意水準 5%で認められる。解決方法パターン 5 は、“「スタッフが一緒に食事をする」と「隣の席から離れる」を共通ベースにした平均 4.7 項目の組み合わせ”であり、その方法が、解決後パターン 3 の“要求も穏やかになった”に貢献している傾向が読み取れる。

3 つめは、解決方法パターン 1 と解決後パターン 5 の相関が有意水準 5%で認められる。解決方法パターン 1 は、“「スタッフが一緒に食事をする」と「おやつや代替え品を提供」を主とした平均 3.5 項目の組み合わせ”であり、それらの方法が、解決後パターン 5 の“食べ物の要求がなくなった”に貢献している傾向が読み取れる。

4 つめは、解決方法パターン 7 と解決後パターン 6 の相関が有意水準 5%で認められる。解決方法パターン 7 は、“「外出」と「席の変更」を共通ベースにして、「食器を小さくしおかわりを増やす、食事数を増やす」、「スタッフが一緒に食事をする」、「おやつや代替え品を提供」の 3 項目も多い平均 5.5 項目の組み合わせ”であり、それらの方法が、解決後パターン 6 の“食事時間まで待てるようになった”に貢献している傾向が読み取れる。(表 2-2-4-8 参照)

参考までに、解決後の各状況との関連を分析したクロス集計によってもこの 4 通りの傾向が確認できる。

1 つめの解決方法パターン 9 では、解決後に“食べ物を要求するまでの時間間隔が長くなった”が 73.4%と多くなっており、これは解決後パターン 4 の主要項目である。

2 つめの解決方法パターン 5 では、解決後に“要求する際の訴え方には焦燥感なく、笑顔も見られるようになった”が 59.8%と多くなっており、これは解決後パターン 3 の主要項目である。

3 つめの解決方法パターン 1 では、解決後に“食べ物の要求は無くなってきた”

が27.9%と相対的に多くなっており、これは解決後パターン5の主要項目である。

4つめの解決方法パターン7では、解決後に“食事の時間まで待てるようになった”が33.6%と相対的に多くなっており、これは解決後パターン6の主要項目である。(表2-2-4-9参照)

(注4) 高齢者パターン別分析の配慮

高齢者パターンと解決方法パターンの双方を潜在確率のまま解決後の状況とのクロス集計不能につき、ここでは便宜的に高齢者パターン1と2を明確に離散した。具体的には、高齢者パターンの潜在確率が大きい方に各事例を定義(＝クラスター化)した上で、解決方法パターンと解決後の状況のクロス集計を行った。このクロス集計でも前記同様に帰属確率を用いた。

5) 食事過剰要求場面の解決に役立った情報

上記の解決方法個々について、役立った情報をあげてもらった。

有効回答延べ795件の解決方法について、役立った情報の割合を算出するとともに、情報をパターン化して、どの情報パターンがどの解決方法に関連するのか分析した。

(1) 役立った情報の概況

有効回答795件のなかで多くあがったものは、「スタッフの声かけ内容・見守り方」が280件(35.2%)、「気分」が181件(22.8%)、「本人の気持ち、意志」が150件(18.9%)、「スタッフとの関係」が146件(18.4%)、「他の入居者との関係」が136件(17.1%)、「食中の様子」が91件(11.4%)などであり、ひとつの解決方法当たり平均2.9項目あげられた。(表2-2-5-1参照)

(2) 役立った情報の組み合わせパターン

ここでも上記の解決方法同様に、実際の組み合わせに高い確率で近似する組み合わせパターンを得るために潜在クラス分析を応用した。

その結果17の組み合わせパターンを得た。

第1パターンは平均2.2項目の組み合わせであり、「スタッフの声かけ内容・見守り方」(99.8%)を共通ベースとして、「スタッフとの関係」(30.9%)や「他の入居者との関係」(22.0%)の人間関係を主として構成されている。第1パターンの該当事例は延べ118件(14.8%)である。

第2パターンは平均2.5項目の組み合わせであり、「満腹感、空腹感」(54.8%)、「当日の食事量・おやつ量」(41.8%)、「最近の食事量」(25.8%)などの食事関係を主として構成されている。第2パターンの該当事例は延べ111件(14.0%)である。

第3パターンは平均2.3項目の組み合わせであり、「他の入居者との関係」

(45.0%)や「スタッフとの関係」(40.9%)の人間関係、「気分」(46.7%)や「本人の気持ち、意志」(23.1%)の心理面を主として構成されている。第3パターンの該当事例は延べ90件(11.3%)である。

第4パターンは平均2.9項目の組み合わせであり、「席の位置」(73.0%)や「周囲の雰囲気・刺激(音・光・匂い)」(35.2%)の環境、「他の入居者との関係」(49.1%)、「スタッフの声かけ内容・見守り方」(33.1%)などを主として構成されている。第4パターンの該当事例は延べ69件(8.7%)である。

第5パターンは平均3.8項目の組み合わせであり、「スタッフの声かけ内容・見守り方」(77.7%)を共通ベースとして、「本人の気持ち、意志」(49.2%)と「気分」(27.2%)の心理面、「表情」(34.3%)や「食事中の会話」(30.0%)などの食事中的状態、「スタッフとの関係」(43.8%)などを主として構成されている。第5パターンの該当事例は延べ58件(7.3%)である。

第6パターンは平均3.0項目の組み合わせであり、「生活習慣(ここ数年)」(77.2%)を共通ベースとして、「生活歴(幼少期から)」(48.3%)を含めた習慣、「本人の気持ち、意志」(23.2%)などを主として構成されている。第6パターンの該当事例は延べ56件(7.0%)である。

第7パターンは平均3.4項目の組み合わせであり、「食中の様子」(84.9%)を共通ベースとして、「表情」(44.4%)、「食事中の会話」(34.6%)、「目線」(33.4%)を含めた食事中的状態を主として構成されている。第7パターンの該当事例は延べ52件(6.5%)である。

第8パターンは平均2.0項目の最少組み合わせであり、「気分」(61.7%)や「運動量」(27.4%)を主として構成されている。第8パターンの該当事例は延べ50件(6.3%)である。

第9パターンは平均4.1項目の組み合わせであり、「体調」(63.8%)、「本人の気持ち、意志」(50.5%)、「気分」(43.7%)、「スタッフの声かけ内容・見守り方」(49.7%)、「スタッフとの関係」(49.3%)などを主として構成されている。第9パターンの該当事例は延べ30件(3.8%)である。

第10パターンは平均3.2項目の組み合わせであり、「盛付」(49.0%)、「食器の大きさ」(42.9%)、「食の嗜好・興味・意欲」(37.0%)、「食材の質(形・固さ・味・匂い・温度)」(28.6%)などの食事関係を主として構成されている。第10パターンの該当事例は延べ29件(3.6%)である。

第11パターンは平均3.9項目の組み合わせであり、「認知機能」(73.5%)、「本人の気持ち、意志」(45.1%)と「気分」(45.0%)の心理面、「食の嗜好・興味・意欲」(46.4%)、「スタッフの声かけ内容・見守り方」(40.8%)などを主として構成されている。第11パターンの該当事例は延べ24件(3.0%)である。

第12パターンは平均3.6項目の組み合わせであり、「認知症の症状」(99.2%)を共通ベースとして、「スタッフの声かけ内容・見守り方」(54.1%)、「食事中的

会話」(46.5%)、「気分」(41.2%)などを主として構成されている。第12パターンの該当事例は延べ24件(3.0%)である。

第13パターンは平均2.5項目の組み合わせであり、「水分状態」(83.1%)を共通ベースとして、「排泄状況」(49.4%)を含めた健康面や「満腹感、空腹感」(30.2%)などを主として構成されている。第13パターンの該当事例は延べ22件(2.8%)である。

第14パターンは平均4.0項目の組み合わせであり、「運動量」(82.2%)を共通ベースとして、「体調」(52.5%)、「睡眠時間・状況」(31.5%)、「体重・BMI」(26.4%)などを含めた健康面、「心配ごと・不満状況」(45.8%)、「気分」(43.1%)、「本人の気持ち、意志」(37.1%)の心理面などを主として構成されている。第14パターンの該当事例は延べ19件(2.4%)である。

第15パターンは平均3.5項目の組み合わせであり、「現病・既往歴」(57.2%)、「体調」(51.4%)、「体重・BMI」(20.7%)などの健康面、「認知症の症状」(33.4%)と「認知機能」(22.1%)の認知能力、「本人の気持ち、意志」(35.6%)、「最近の食事量」(21.6%)や「満腹感、空腹感」(20.1%)の食事関係、「最近の食習慣」(26.8%)などを主として構成されている。第15パターンの該当事例は延べ15件(1.9%)である。

第16パターンは平均4.3項目の最多組み合わせであり、「本人の気持ち、意志」(90.0%)と「心配ごと・不満状況」(80.1%)を共通ベースとして、「気分」(71.8%)を含めた心理面、「スタッフの声かけ内容・見守り方」(55.7%)、「周囲の雰囲気・刺激(音・光・匂い)」(23.3%)、「食中の様子」(21.8%)、「食の嗜好・興味・意欲」(21.1%)などを主として構成されている。第16パターンの該当事例は延べ15件(1.9%)である。

第17パターンは平均4.1項目の組み合わせであり、「食の嗜好・興味・意欲」(96.8%)と「満腹感、空腹感」(94.3%)を共通ベースとして、「当日の食事量・おやつ量」(38.8%)を含めた食事関係、「スタッフとの関係」(34.7%)、「表情」(30.5%)、「気分」(21.5%)、「周囲の雰囲気・刺激(音・光・匂い)」(20.3%)などを主として構成されている。第17パターンの該当事例は延べ15件(1.9%)である。(表2-2-5-2参照)(潜在クラスモデルの評価経緯は表2-2-5-3参照)

(3) 情報の組み合わせパターンが関連する解決方法

上記の情報組み合わせがどの解決方法に関連するか分析と次の傾向である。

第13パターン(「水分状態」を共通ベースに、「排泄状況」を含めた健康面や「満腹感、空腹感」を主にした平均2.5項目の組み合わせ)は、「水分の摂取を増やす」が87.9%をも占めている。

第10パターン(「盛付」、「食器の大きさ」、「食の嗜好・興味・意欲」など食事関係を主にした平均3.2項目の組み合わせ)は、「食器を小さくし、おかわりを増

やす、食事数を増やす」が 40.8%を占め、「隣の席から離れる」が 11.4%、「味の感想を伺う」が 10.0%となっている。

第 4 パターン（「席の位置」や「周囲の雰囲気・刺激（音・光・匂い）」の環境、「他の入居者との関係」、「スタッフの声かけ内容・見守り方」などを主にした平均 2.9 項目の組み合わせ）は、「席の変更」が 35.2%、「隣の席から離れる」が 29.9%を占めている。

第 14 パターン（「運動量」を共通ベースに、「体調」や「睡眠時間・状況」などの健康面、心理面などを主にした平均 4.0 項目の組み合わせ）は、「外出」が 34.6%を占め、「食後のレクリエーション活動への誘導」が 18.6%、「おやつや代替え品を提供」が 15.4%となっている。

第 17 パターン（「食の嗜好・興味・意欲」や「満腹感、空腹感」など食事関係を共通ベースに、「スタッフとの関係」、「表情」などを主にした平均 4.1 項目の組み合わせ）は、「おやつや代替え品を提供」が 32.2%、「味の感想を伺う」が 27.0%を占めている。

第 12 パターン（「認知症の症状」を共通ベースに、「スタッフの声かけ内容・見守り方」、「食中の会話」、「気分」を主にした平均 3.6 項目の組み合わせ）は、「スタッフが一緒に食事をする」が 28.3%、「おやつや代替え品を提供」が 17.3%、「訴えを受容し、会話を多くする」が 10.3%を占めている。

第 9 パターン（「本人の気持ち、意志」など心理面、「体調」、「スタッフの声かけ内容・見守り方」、「スタッフとの関係」などを主とした平均 4.1 項目の組み合わせ）は、「外出」が 26.8%、「訴えを受容し、会話を多くする」が 14.6%、「食事以外の話をする」が 14.3%を占めている。

第 1 パターン（「スタッフの声かけ内容・見守り方」を共通ベースに、「スタッフとの関係」や「他の入居者との関係」の人間関係を主とした平均 2.2 項目の組み合わせ）は、「スタッフが一緒に食事をする」が 25.2%、「訴えを受容し、会話を多くする」が 14.7%を占めている。

第 8 パターン（「気分」や「運動量」を主とした平均 2.0 項目と最少の組み合わせ）は、「外出」が 24.3%、「食後のレクリエーション活動への誘導」が 19.3%を占めている。

第 7 パターン（「食事の様子」を共通ベースに、「表情」、「食事中的会話」、「視線」を含めた食事中的状態を主とした平均 3.4 項目の組み合わせ）は、「スタッフが一緒に食事をする」が 22.0%、「訴えを受容し、会話を多くする」が 11.2%、「味の感想を伺う」が 11.8%、「隣の席から離れる」が 12.9%、「席の変更」が 10.8%となっている。

第 16 パターン（「本人の気持ち、意志」や「心配事・不満状況」など心理面を共通ベースに、「スタッフの声かけ内容・見守り方」などを主にした平均 4.3 項目と最多の組み合わせ）は、「席の変更」が 21.2%、「おやつや代替え品を提供」が

14.8%、「味の感想を伺う」が13.4%、「訴えを受容し、会話を多くする」が10.7%、「外出」が13.8%となっている。

第2パターン（「満腹感、空腹感」、「当日の食事量・おやつ量」、「最近の食事量」など食事関係を主にした平均2.5項目の組み合わせ）は、「おやつや代替え品を提供」が20.2%、「水分の摂取を増やす」が16.1%、「低カロリーにして大盛りにした」が15.4%となっている。

第5パターン（「スタッフの声かけ内容・見守り方」を共通ベースに、心理面、食事中の状態、人間関係を主とした平均3.8項目の組み合わせ）は、「スタッフが一緒に食事をする」が18.9%、「訴えを受容し、会話を多くする」が11.5%、「おやつや代替え品を提供」が12.2%、「水分の摂取を増やす」が10.2%となっている。

第3パターン（「他の入居者との関係」や「スタッフとの関係」の人間関係、「気分」や「本人の気持ち、意志」の心理面を主にした平均2.3項目の組み合わせ）は、「訴えを受容し、会話を多くする」が16.0%、「外出」が12.4%、「食後のレクリエーション活動への誘導」が11.0%となっている。

第15パターン（「現病・既往歴」、「体調」などの健康面、認知能力、「本人の気持ち、意志」などを主にした平均3.5項目の組み合わせ）は、「おやつや代替え品を提供」が15.7%、「低カロリーの間食や夜食の提供」が14.8%、「味の感想を伺う」が13.1%となっている。

第11パターン（「認知機能」、「本人の気持ち、意志」、「気分」、「食の嗜好・興味・意欲」、「スタッフの声かけ内容・見守り方」などを主とした平均3.9項目の組み合わせ）は、「献立の掲示や説明」が13.7%、「訴えを受容し、会話を多くする」が13.2%となっている。

第6パターン（「生活習慣（ここ数年）」を共通ベースに、「生活歴（幼少期から）」を含めた習慣、「本人の気持ち、意志」などを主とした平均3.0項目の組み合わせ）は、「興味のあるものを提供」が11.9%、「おやつや代替え品を提供」が10.3%となっている。（表2-2-5-4参照）

6) 絶対にやってはいけない対応

絶対にやってはいけない対応としては、有効回答189件中、「否定・指示・命令的な声かけ」が176件（93.1%）、「大きな声で、いらいらした気持ちで受け答えする」が169件（89.4%）、「そのままにして放っておく」が168件（88.9%）、「批判する」と「食べるだけ食べさせ、過剰に摂取させる」が各159件（84.1%）、となっている。（表2-2-6-1参照）

(表 2-2-1-1) 回答者の年齢

	有効回答数	24 歳以下	25～29 歳	30～34 歳	35～39 歳	40～44 歳	45～49 歳	50～54 歳	55～59 歳	60 歳以上
実数	199	5	26	38	34	17	26	20	21	12
パーセント	100.0	2.5	13.1	19.1	17.1	8.5	13.1	10.1	10.6	6.0

(平均年齢等)

有効回答数	平均 歳	標準偏差 歳	最小値 歳	最大値 歳
199	41.2	11.3	22	66

(表 2-2-1-2) 回答者の性別割合

	有効回答数	男	女
実数	202	46	156
パーセント	100.0	22.8	77.2

(表 2-2-1-3) 回答者の現在の職名

	有効回答数	ケアワーカー	相談員	ケアマネジャー	看護師	その他
実数	190	66	10	51	9	66
パーセント	100.0	34.7	5.3	26.8	4.7	34.7

(表 2-2-1-4) 回答者の役職

	有効回答数	施設長	管理者	主任・リーダー	事務長	理事長	なし
実数	195	9	80	44	1	0	66
パーセント	100.0	4.6	41.0	22.6	0.5	0.0	33.8

(表 2-2-1-5) 回答者の所有資格

	有効回答数	看護師(准看護師)	介護福祉士	社会福祉士	ケアマネジャー	ヘルパー	その他
実数	201	15	121	7	69	83	17
パーセント	100.0	7.5	60.2	3.5	34.3	41.3	8.5

(表 2-2-1-6) 回答者の所属事業種

	有効回答数	介護老人福祉施設	介護老人福祉施設(ユニット型)	認知症対応型共同生活介護事業	小規模多機能型通所介護事業	その他
実数	203	2	3	188	1	11
パーセント	100.0	1.0	1.5	92.6	0.5	5.4

(表 2-2-1-7) 回答者の所属事業所での勤続年数

有効回答数	平均 年	標準偏差 年	最小値 年	最大値 年
205	4.3	3.4	0.2	21.5

(表 2-2-1-8) 回答者の総介護経験年数

有効回答数	平均 年	標準偏差 年	最小値 年	最大値 年
196	8.7	5.3	0.6	33.7

(表 2-2-2-1) 食事過剰要求の解決経験の有無

	有効回答数	ある	ない
実数	194	160	34
パーセント	100.0	82.5	17.5

(表 2-2-2-2) 高齢者の年齢

	解決経験のある 有効回答数	74歳以下	75～79歳	80～84歳	85～89歳	90歳以上
実数	149	13	26	30	58	22
パーセント	100.0	8.7	17.4	20.1	38.9	14.8

(平均年齢等)

解決経験のある 有効回答数	平均 歳	標準偏差 歳	最小値 歳	最大値 歳
149	83.2	6.9	60	100

(表 2-2-2-3) 高齢者の性別割合

	解決経験のある 有効回答数	男	女
実数	157	35	122
パーセント	100.0	22.3	77.7

(表 2-2-2-4) 認知症の原因疾患

	解決経験のある 有効回答数	アルツハイマー型	脳血管疾患型	前頭側頭型	混合	その他
実数	147	85	39	4	8	11
パーセント	100.0	57.8	26.5	2.7	5.4	7.5

(表 2-2-2-5) 機能障害部位

	解決経験のある人	首	上肢	下肢	体幹	無回答 (=なし)
実数	160	0	2	45	0	113
パーセント	100.0	0.0	1.3	28.1	0.0	70.6

(表 2-2-2-6) 食事介助

	解決経験のある 有効回答数	全介助	一部介助	自立
実数	158	3	43	112
パーセント	100.0	1.9	27.2	70.9

(表 2-2-2-7) 移動

	解決経験のある 有効回答数	杖自立	短距離歩行 自立	長距離歩行 自立	その他(回答 者追記)
実数	124	13	66	44	1
パーセント	100.0	10.5	53.2	35.5	0.8

(表 2-2-2-8) 排泄

	解決経験のある 有効回答数	身体介助必 要	身体介助必 要なし	その他(回答 者追記)
実数	143	82	61	2
パーセント	100.0	57.3	42.7	1.4

(表 2-2-2-9) 入浴

	解決経験のある 有効回答数	全介助	移動介助	洗身洗髪介 助	その他一部 介助	自立
実数	151	31	19	53	38	10
パーセント	100.0	20.5	12.6	35.1	25.2	6.6

(表 2-2-2-10) 認知症の重症度

	解決経験のある 有効回答数	I 何らかの認知症を有するが、日常生活は家庭内及び社会的に思疎通の困 ほぼ自立している	II 日常生活に支障を来たすような症状、行動や意思疎通の困難さが多少見られても、誰かが注意していれば自立できる	III ランクIIの症状がときどき見られ、介護を必要とする(徘徊、失禁など)	IV ランクIIの症状が頻繁に見られ、常に介護を必要とする	V 著しい精神症状や問題行動あるいは、重篤な身体疾患が見られ専門医療を要する
実数	159	11	38	53	51	6
パーセント	100.0	6.9	23.9	33.3	32.1	3.8

(表 2-2-2-11) 身体障害の重症度

	解決経験のある 有効回答数	J 何らかの障害を有するが、日常生活はほぼ自立しており独力で外出する	A 屋内の生活は概ね自立しているが、介助なしに外出しない	B 屋内の生活は何らかの介助を要し、日中もベッド上での生活主体で座位を保つ	C 一日中ベッドで過ごし、排泄、食事、着替えにおいて介助を要する
実数	154	17	105	28	4
パーセント	100.0	11.0	68.2	18.2	2.6

(表 2-2-2-12) 食事過剰要求高齢者のパターン
(潜在クラス2クラスモデルのプロフィール)

(n=131)

項目	カテゴリー	全体	パターン1	パターン2
			自立、中程度重症度	一部介助、中高程度重症度
サイズ		1.000	0.654	0.346
性別	男	0.199	0.196	0.204
	女	0.802	0.804	0.796
食事介助	全介助	0.015	0.000	0.044
	一部介助	0.237	0.050	0.590
	自立	0.748	0.950	0.366
認知症の重症度	I	0.076	0.102	0.028
	II	0.267	0.350	0.111
	III	0.298	0.301	0.291
	IV	0.321	0.203	0.544
	V	0.038	0.044	0.027
身体障害の重症度	J	0.122	0.147	0.075
	A	0.672	0.846	0.343
	B	0.191	0.007	0.539
	C	0.015	0.000	0.044

(参考) 該当事例数 → (131) (86) (45)

(表 2-2-2-13) 潜在クラスモデル評価 (高齢者パターン)
(情報量規準)

モデル(クラス数)	BIC	AIC
モデル1(クラス数1)	945.7	916.9
モデル2(クラス数2)	961.6	901.3
モデル3(クラス数3)	1000.2	908.1
モデル4(クラス数4)	1037.6	914.0

(表 2-2-3-1) 解決前の状況

	解決経験のある有効回答数	自分の食事が終わっても他の人の食事を取って食べてしまう	自分の食事が終わっても、何か食べるものは無いが要求したり、落ち着かなかった	食事を終えても、何も食べていないと怒っていた	近くにあるものを口に入れようとしたり、かじったりすることが度々みられた	自分の食事を早く食べてしまい、残っているお膳をさがし、次々と食べてしまっていた	その他
実数	157	48	69	57	30	17	16
パーセント	100.0	30.6	43.9	36.3	19.1	10.8	10.2

(表 2-2-3-2) 解決後の状況

	解決経験のある有効回答数	食事の時間まで待てるようになった	食べ物の要求は無くなった	食べ物を要求することは徐々に減って、人のお膳を食べてまわらなくなった	要求する際の訴え方には焦燥感なく、笑顔も見られるようになった	食べ物を要求するまでの時間間隔が長くなった	自分の食事で満足するようになった	その他
実数	155	17	25	32	30	24	45	12
パーセント	100.0	11.0	16.1	20.6	19.4	15.5	29.0	7.7

(表 2-2-3-3) 解決前のパターン
(潜在クラス 5 クラスモデルのプロフィール)

		(n=112)				
状況	全体	パターン1	パターン2	パターン3	パターン4	パターン5
		食後も食物を要求したり落ち着かなかった	食後も食べていないと怒っていた	食後に他人の食事を取って食べていた	食後も残っているお膳を探し食べまわっていた	近くのを口に入れたりかじっていた
サイズ	1.000	0.399	0.211	0.158	0.137	0.095
自分の食事が終わっても他の人の食事を取って食べてしまう	0.313	0.241	0.036	0.990	0.334	0.070
自分の食事が終わっても、何か食べるものは無いが要求したり、落ち着かなかった	0.464	0.995	0.047	0.015	0.337	0.098
食事を終えても、何も食べていないと怒っていた	0.402	0.425	0.995	0.018	0.137	0.008
近くにあるものを口に入れようとしたり、かじったりすることが度々みられた	0.170	0.001	0.001	0.190	0.332	0.981
自分の食事を早く食べてしまい、残っているお膳をさがし、次々と食べてしまっていた	0.134	0.001	0.001	0.003	0.967	0.003
(参考) 平均項目数 →	1.5	1.7	1.1	1.2	2.1	1.2
該当事例数 →	(112)	(45)	(24)	(18)	(15)	(11)

(表 2-2-3-4) 潜在クラスモデル評価 (解決前パターン)
(情報量規準)

モデル(クラス数)	BIC	AIC
モデル1(クラス数1)	658.5	644.9
モデル2(クラス数2)	652.9	623.0
モデル3(クラス数3)	658.6	612.4
モデル4(クラス数4)	673.6	611.1
モデル5(クラス数5)	685.0	606.1
モデル6(クラス数6)	712.2	617.1
モデル7(クラス数7)	723.9	612.4
モデル8(クラス数8)	750.5	622.7

(表 2-2-3-5) 解決後のパターン
(潜在クラス 6 クラスモデルのプロフィール)

(n=112)

	全体	パターン1	パターン2	パターン3	パターン4	パターン5	パターン6
状況		自分の食事 で満足する ようになった	人のお膳を 食べまわら なくなった	要求も穏や かになった	食べ物の要 求までの時 間間隔が長 くなった	食べ物の要 求がなくな った	食事時間ま で待てるよ うになった
サイズ	1.000	0.206	0.203	0.198	0.179	0.136	0.078
食事の時間まで待てるようになった	0.125	0.012	0.001	0.077	0.150	0.030	0.979
食べ物の要求は無くなってきた	0.170	0.010	0.001	0.001	0.150	0.989	0.071
食べ物を要求することは徐々に減って、人のお膳を食べまわらなくなった	0.232	0.002	0.994	0.010	0.150	0.003	0.005
要求する際の訴え方には焦燥感なく、笑顔も見られるようになった	0.232	0.117	0.037	0.993	0.004	0.003	0.040
食べ物を要求するまでの時間間隔が長くなった	0.188	0.003	0.003	0.044	0.988	0.002	0.005
自分の食事で満足するようになった	0.259	0.994	0.002	0.017	0.150	0.121	0.091
(参考)平均項目数 →	1.2	1.1	1.0	1.1	1.6	1.1	1.2
該当事例数 →	(112)	(23)	(23)	(22)	(20)	(15)	(9)

(表 2-2-3-6) 潜在クラスモデル評価 (解決後パターン)
(情報量規準)

モデル(クラス数)	BIC	AIC
モデル1(クラス数1)	693.7	677.3
モデル2(クラス数2)	692.5	657.2
モデル3(クラス数3)	692.0	637.6
モデル4(クラス数4)	700.7	627.3
モデル5(クラス数5)	714.5	622.0
モデル6(クラス数6)	727.7	616.2
モデル7(クラス数7)	747.4	617.0
モデル8(クラス数8)	777.2	627.7

(表 2-2-3-7) 解決前後のパターンの相関行列
(全体)

(n=112)

			解決後のパターン					
			パターン1	パターン2	パターン3	パターン4	パターン5	パターン6
			自分の食事で満足するようになった	人のお膳を食べまわらなくなった	要求も穏やかになった	食べ物の要求までの時間間隔が長くなった	食べ物の要求がなくなった	食事時間まで待てるようになった
解決前のパターン	パターン1	食後も食物要求したり落ち着かなかった	-0.283 **	-0.012	0.165	0.040	0.057	0.073
	パターン2	食後も食べていないと怒っていた	0.058	-0.169	0.053	0.054	0.065	-0.072
	パターン3	食後に他人の食事を取って食べていた	0.092	0.261 *	-0.091	-0.209 *	-0.051	-0.035
	パターン4	食後も残っているお膳を探し食べまわっていた	0.118	-0.003	-0.194 *	0.227 *	-0.159	-0.013
	パターン5	近くのを口に入れたりかじっていた	0.142	-0.065	-0.008	-0.156	0.068	0.037

(注) 潜在クラス帰属確率による相関係数

(有意水準) 1%水準 **

5%水準 *

(表 2-2-3-8) 解決前後のパターンの相関行列
(高齢者パターン1 “自立、中程度重症度” の場合)

(n=74)

			解決後のパターン					
			パターン1	パターン2	パターン3	パターン4	パターン5	パターン6
			自分の食事で満足するようになった	人のお膳を食べまわらなくなった	要求も穏やかになった	食べ物の要求までの時間間隔が長くなった	食べ物の要求がなくなった	食事時間まで待てるようになった
解決前のパターン	パターン1	食後も食物要求したり落ち着かなかった	-0.256 *	0.007	0.097	0.005	0.049	0.150
	パターン2	食後も食べていないと怒っていた	0.057	-0.172	0.064	0.118	-0.019	-0.096
	パターン3	食後に他人の食事を取って食べていた	0.106	0.155	-0.005	-0.184	-0.082	0.019
	パターン4	食後も残っているお膳を探し食べまわっていた	0.180	0.128	-0.174	0.093	-0.146	-0.107
	パターン5	近くのを口に入れたりかじっていた	0.058	-0.090	-0.116	-0.100	0.278	-0.029

(注) 潜在クラス帰属確率による相関係数

高齢者パターンは帰属確率をクラスター化した(集計手法制約上の配慮)

(帰属確率によるパターン1の事例数に近似するもやや異なる)

(有意水準) 1%水準 **

5%水準 *

(表 2-2-3-9) 解決前後のパターンの相関行列
(高齢者パターン2 “一部介助、中高程度重症度” の場合)

(n=38)

			解決後のパターン					
			パターン1	パターン2	パターン3	パターン4	パターン5	パターン6
			自分の食事で満足するようになった	人のお膳を食べまわらなくなった	要求も穏やかになった	食べ物の要求までの時間間隔が長くなった	食べ物の要求がなくなった	食事時間まで待てるようになった
解決前のパターン	パターン1	食後も食物要求したり落着かなかった	-0.351 *	0.032	0.301	0.119	0.016	-0.154
	パターン2	食後も食べていないと怒っていた	0.073	-0.048	-0.053	-0.132	0.299	-0.076
	パターン3	食後に他人の食事を取って食べていた	0.071	0.370 *	-0.242	-0.257	0.055	-0.127
	パターン4	食後も残っているお膳を探し食べまわっていた	0.041	-0.211	-0.216	0.418 **	-0.152	0.176
	パターン5	近くのを口に入れたりかじっていた	0.256	-0.151	0.151	-0.246	-0.107	0.173

(注) 潜在クラス帰属確率による相関係数

高齢者パターンは帰属確率をクラスター化した(集計手法制約上の配慮)

(帰属確率によるパターン2の事例数に近似するもやや異なる)

(有意水準) 1%水準 **

5%水準 *

(表 2-2-3-10) 高齢者パターン別にみた解決前の状況

	【実数】			【比率】(縦 100)		
	全体	パターン1 自立、中程 度重症度	パターン2 一部介助、 中高程度重 症度	全体	パターン1 自立、中程 度重症度	パターン2 一部介助、 中高程度重 症度
有効回答数	112	70	42	100.0	100.0	100.0
自分の食事が終わっても他の人の食事を取って食べてしまう	35	19	16	31.3	27.1	38.1
自分の食事が終わっても、何か食べるものは無いが要求したり、落ち着かなかった	52	35	17	46.4	50.0	40.5
食事を終えても、何も食べていないと怒っていた	45	33	12	40.2	47.1	28.6
近くにあるものを口に入れようとしたり、かじったりすることが度々みられた	19	6	13	17.0	8.6	31.0
自分の食事を早く食べてしまい、残っているお膳をさがし、次々と食べてしまっていた	15	6	9	13.4	8.6	21.4

(注) 潜在クラス帰属確率による集計

(表 2-2-3-11) 高齢者パターン別にみた解決後の状況

	【実数】			【比率】(縦 100)		
	全体	パターン1 自立、中程 度重症度	パターン2 一部介助、 中高程度重 症度	全体	パターン1 自立、中程 度重症度	パターン2 一部介助、 中高程度重 症度
有効回答数	112	70	42	100.0	100.0	100.0
食事の時間まで待てるようになった	14	10	4	12.5	14.3	9.5
食べ物の要求は無くなってきた	19	13	6	17.0	18.6	14.3
食べ物を要求することは徐々に減って、人のお膳を食べまわらなくなった	26	11	15	23.2	15.7	35.7
要求する際の訴え方には焦燥感なく、笑顔も見られるようになった	26	17	9	23.2	24.3	21.4
食べ物を要求するまでの時間間隔が長くなった	21	12	9	18.8	17.1	21.4
自分の食事で満足するようになった	29	18	11	25.9	25.7	262.2

(注) 潜在クラス帰属確率による集計